

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：33601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380789

研究課題名(和文) 社会福祉理論史にみる現代社会福祉の枠組みの再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of the framework of contemporary social welfare in the history of social welfare theories

研究代表者

野口 友紀子 (NOGUCHI, Yukiko)

長野大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：20387418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：戦後から60年代までの社会福祉の議論を分析した結果、当時は社会福祉の精神をめぐる視点やコミュニティ・オーガニゼーションへの取り組みの視点を持っていたことを明らかにできた。これは、従来の社会福祉理論史が政策的視点と技術的視点からのみ描かれていたこととは異なる。

今回明らかにした新たな視点により、第一に60年代までの社会福祉理論の土台には政策や技術以外の多様なかたちがあることがわかった。第二に現代の「福祉マインド」や「地域組織化」につながる議論の史的な説明ができるようになった。先行研究とは違う視点を発見したことで、従来の社会福祉理論史の枠組みを描きなおすことができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to rewrite the postwar history of social work theories through the analysis of discussions on social welfare from 1945 to 1960s. As a result, we found two new viewpoints to modify it and these are something like social welfare mind and community organization. These are different from previous studies that have only the policy theory and the art theory in the postwar history of social welfare theories. First, these viewpoints help us to understand a diversity of the origin of social welfare theories until the 60s. Second, we can historically explain today's discussions on the contemporary 'social welfare mind' and 'community organization'. It is found from the results that we can amend the framework of the history of social welfare theories.

研究分野：社会福祉史

キーワード：社会福祉理論史 愛 地域組織化 社会事業精神 コミュニティ・オーガニゼーション 地域活動

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の戦後の社会福祉理論史では、政策論と技術論に区分されてきた。それは、社会福祉理論は学問的にソーシャルワークの精緻化を目指す理論と社会福祉の本質を追究する理論の2つの領域とに分けられてきたからである。そのため、同一の学問領域で社会福祉史とソーシャルワーク史のふたつの分離された歴史が存在する。しかしながら、戦後の議論に目を通すと、必ずしもそれら2つのに分けられるとは言えない。政策論と技術論以外の理論の存在はこれまで検討されてこなかった。

(2) 従来の社会福祉史の研究の特徴は、経済発展段階に応じた社会福祉の歴史を描いている点にある。しかし、経済発展は社会福祉の成立や展開の要因のひとつにすぎないため、経済発展の枠組み以外のフレームワークを提示すれば、従来とは異なる歴史を描くことができる。

## 2. 研究の目的

(1) 戦後から60年代までの社会福祉理論の潮流を検討することを通して現代の社会福祉を捉える新たな視点の可能性を探る。なお、応募時には80年代までを想定していたが、社会福祉理論においては50年代から60年代が転機であったことが分かったため、ここでは60年代までとおいている。

(2) 従来の社会福祉史は主として経済状況と福祉制度を結びつけて描いている。しかし、現在の社会福祉への要求は司法、雇用の分野にまで広がり従来の視点では捉えきれなくなっている。現実の社会福祉の拡大に見合う枠組みの再構築のために社会福祉理論の形成過程からの社会福祉体系の構築を史的に洗い出すことで明らかにし、社会福祉を捉える新たな視点の可能性を探る。

## 3. 研究の方法

(1) 文献研究である。戦後から60年代までの雑誌『社会事業』を使用し、社会福祉(社会事業)に関する当時の社会福祉事業関係者たちの論考を分析した。

(2) すでに検討済みである戦前、戦中の社会事業理論の分析結果と本研究で行った戦後の社会福祉理論について、新しい分析視点である「内在的視点」による統一的な説明を行った。そして、戦前の分析結果と戦後の分析結果を比較してどのように変化が見られるのかを検討した。

## 4. 研究成果

(1) 「『社会事業』にみる「もうひとつの本質論争」 社会事業の本質はどのように議論されたのか」では、50年代の理論の混迷が明らかになった。社会福祉をめぐる議論は、政策論か技術論かという対立構造が一般的に思い浮かぶ。しかしながら、『大阪社会福祉研究』誌上の本質論争に加え、同時期の他誌での社会福祉の本質をめぐる議論展開も射程にいれることで、50年代半ばの理論形成の状況がケースワークやサービスや愛の議論も含めて複雑であったことが見て取れた。特に、サービスについては、ケースワークの議論と関わりや、本質論争で議論された技術をめぐる対立だけでない議論展開が明らかになった。

従来の本質論争の議論に加えて「もうひとつの本質論争」という新たな分析対象を設定したことで、『大阪社会福祉研究』誌上の本質論争のみに特化されていた本質論の分析に新たな知見を付け加えることができた。

(2) 「戦後日本の社会福祉における記憶と忘却 50年代半ばの『社会事業』の回顧特集から」では、回顧特集を分析した。1945年から55年間のリアルタイムの議論には、少数とはいえ大河内の戦前の社会事業論との関係を述べていたという点で戦前の議論の継承の視

点があった。しかし、生活保護制度や社会保障制度と関わらせた議論、専門職やコミュニティ・オーガニゼーションの導入の必要性という戦後新たに提出された論点もあった。50年代半ばの回顧の中には社会事業とは何かを問う議論は表面的には見えなくなり、本質論と関わる社会事業の科学性の議論は少数であった。このことは、本質論の消滅や本質論からの転換を意味するのではなく、回顧においては戦前と戦後の相違や同一の観点が重視されたこと、同時期に社会事業に関する定義付けの問題が進行中であり、総括の段階ではなかったことが考えられる。

50年代の回顧の分析から、50年代は戦前の社会事業をどのように位置付けるのが重要な論点であり、本研究が出発点としている戦後の研究だけではなく、戦前とのつながりを見る必要性があることが明らかになった。

(3) 「社会事業をめぐる3つの議論  
1946-52年の社会福祉本質論争以前の議論から」では、この時期に3つのタイプの議論があったことを明らかにできた。第一に、戦前に大河内が述べていた社会政策の代位としての社会事業という側面が弱められ、戦後に登場した社会保障制度体系という制度上の枠組みの中に積極的に社会事業を位置づけようという視点が多く見出された。そして、社会保険が社会政策であることと並んで公的扶助が社会事業として捉えられた。この視点は、戦前期に存在した住宅改良、社会衛生、社会教育などを社会事業の固有の事業と捉えていた視点を抜け落すことにもなった。第二に、個別的生活への関与としてのケースワークを社会事業の本質と捉える戦前からの継承的視点の存在である。第三に、この時期には地域組織化を図ることを社会事業の活動として位置づける議論があり、地域社会に住む人びとを対象とする活動を社会事業と

捉えた議論が存在するようになったことである。社会事業を地域社会に住む人びとを権利主体とした活動と捉え、個別の個人の生活への関与を越えた地域社会に向けた取り組みであることを強調したものであった。これは経済市場ではなく、「社会」の中に社会事業の固有性をおき直す視点へと議論であった。

(4) 「戦後日本の『社会事業』誌にみる「社会事業精神」の分析 社会福祉・愛・ヒューマニズム」では、社会事業とは何かを明らかにしようとする議論と愛の関係を検討した。社会事業の本質をめぐる議論は政策論や技術論とよばれ、社会福祉理論研究の主流となっている。しかし、『社会事業』誌では本質論には当てはまらない議論、すなわち「社会事業精神」と社会事業とを関わらせた議論がみられた。戦前に大河内が社会事業の精神性を否定したように、戦後においても日本の社会事業の近代化を押し進めるためには愛を基盤とした慈善的なものからの決別が必要とされた。科学性の追求のために愛を否定するという構図は一般的にわかりやすいのだが、実際にはもう少し複雑であった。科学性と愛が論者によっては必ずしも対立するものと捉えられておらず、議論の背景には社会事業としての科学性と社会事業としての愛とが社会事業を論じる上で異なるレベルのものとして理解されていたからであった。社会科学として社会事業をその本質とした場合、ソーシャルワークに愛があっても社会事業の科学性は揺るがない。ここからは、対抗としての「愛」だけではなく、科学性と並行する「愛」が見て取れた。社会事業をめぐる議論には、科学性を前提とする政策や技術を本質と捉える議論だけでなく「愛」を前提とする活動の動機や行為の背景を説明する議論、すなわち社会事業という活動が発現する理由を説明する議論であった。このことが

ら社会福祉の理論史として戦後から 50 年代末までの議論を捉えた場合、社会科学としての科学性を主張した議論とソーシャルワークの科学性の議論という 2 つの「近代化 = 科学性」の議論に加えて愛と社会事業精神の議論の潮流があったことが分かった。

(5) 「戦後日本の社会福祉にみる「地域組織化」の生成過程 1945-60 年のコミュニティ・オーガニゼーションの議論から」では、戦後から 50 年代にかけてのコミュニティ・オーガニゼーション(以下 C.O)の議論をたどり、『社会事業』誌上での日本における C.O の議論の多様化を分析した。C.O の議論はその内容から大きく 3 つの議論、地域に着目した議論、組織化に焦点をあてた議論、そして C.O を明らかにしようとする議論に分けることができた。C.O の戦後の生成過程で明らかになったのは、従来の社会福祉協議会の活動としての C.O という位置付け以外の C.O の生成と受容であった。戦後の社会福祉理論は政策論と技術論の二項対立的に論じられてきた。しかし、C.O の議論に技術論以外の可能性があったなら、第三の潮流として捉えることが必要となる。また、新たに検討すべきこととして社会福祉協議会が設立される以前から「地域組織化」の流れがあったことを考えると、戦前の地域組織化の流れ、報徳社運動や地方改良運動、農村における生活回線の取り組みなどの関係も検討の必要があることを明らかにした。

(6) 「戦後日本の農村にみる地域組織化への取り組み 社会福祉協議会と生活改善諸活動」では、戦後から 1950 年代末までの農村における社会福祉事業の地域活動と社会福祉事業以外の活動、すなわち農林省や文部省、総理府が主導した運動である生活改善普及事業や新生活運動、公民館活動、保健所の活動との違いを当時の関係者たちがどのよ

うに捉えていたのかを明らかにした。社会福祉事業における地域活動の主体となる社会福祉協議会の活動に対する見方には、地域社会にある他の機関と並列的な位置づけで独自の活動内容を持つと考える議論、他の機関の活動を社会福祉活動と位置づける議論、他の機関の活動と社会福祉協議会の活動は同じ内容を含んでいるという議論の 3 つがあった。このことは活動内容や目的が明確ではないために、社会福祉事業関係者においても社会福祉協議会に関する議論が統一的でなかったことを意味した。農村における地域組織化による社会福祉事業は、社会福祉協議会の独自事業としての展開として、あるいは他の機関の活動も含めた広い意味での社会福祉事業としての展開として、さらには他の機関と重複する内容も含めた社会福祉事業としての展開としてのように統一されずに考えられていた。このことは社会福祉事業の独自性や特徴などを考慮されないまま他領域との関係性を明確にせず社会福祉事業が進められてきたとも言える。そもそも農村では青年団や婦人会が戦後に再建されており、地域住民の組織化は目新しいものではなかったのである。そのような状況で、社会福祉協議会が取り組むべき活動の独自性は打ち出せなかったといえる。

##### 5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計 6 件)

野口友紀子、戦後日本の農村にみる地域組織化への取り組み 社会福祉協議会と生活改善諸活動、東京社会福祉史研究会『東京社会福祉史研究』第 10 号、査読有り、2016、45-59

野口友紀子、戦後日本の社会福祉にみる「地域組織化」の生成過程 1945-60 年のコミュニティ・オーガニゼーションの議論から、社会事業史学会『社会事業史研究』第 49 号、査読有り、2016、19-33

野口友紀子、戦後日本の『社会事業』誌

にみる「社会事業精神」の分析 社会福祉・愛・ヒューマニズム、社会事業史学会『社会事業史研究』第48号、査読有り、2015、105-120

野口友紀子、社会事業をめぐる3つの議論 1946-52年の社会福祉の本質論争以前の議論から、『長野大学紀要』36(3)、査読なし、2015、23-32

URL <http://id.nii.ac.jp/1025/00001130/>  
野口友紀子、戦後日本の社会福祉における記憶と忘却 50年代半ばの『社会事業』の回顧特集から、『長野大学紀要』36(2)、査読なし、2014、65-76

URL <http://id.nii.ac.jp/1025/00001112/>  
野口友紀子、『社会事業』にみる「もうひとつの本質論争」 社会事業の本質はどのように議論されたのか、社会事業史学会『社会事業史研究』第45号、査読有り、2014、15-30

〔学会発表〕(計7件)

野口友紀子、共同募金運動にみる寄付行為の意味づけ 戦後民間社会事業の財源確保と共同募金理念、日本社会福祉学会第63回秋季大会、久留米大学(福岡県・久留米市)、2015年9月20日

野口友紀子、戦前期における農村救済の取り組み 農村社会事業とは何だったのか、社会事業史学会第43回大会、愛知県立大学(愛知県・長久手市)、2015年5月9日

野口友紀子、戦後日本の農村にみる社会福祉事業と地域組織化の関係 生活改善普及事業・新生活運動・公民館、東京社会福祉史研究会第100回例会、専修大学(東京都・千代田区)、2015年4月25日

野口友紀子、戦後日本における「地域組織化」に関する2つの議論 1945-60年のコミュニティ・オーガニゼーションの議論から、日本社会福祉学会第62回秋季大会、早稲田大学(東京都・新宿区)

2014年11月30日

野口友紀子、50年代の『社会事業』誌にみる「精神主義」の議論 戦後日本の社会福祉と愛の関係、社会事業史学会第42回大会、長崎純心大学(長崎県・長崎市)、2014年5月10日

野口友紀子、社会福祉事業にみる戦後十年の歴史認識 50年代の『社会事業』にみる回顧特集から、日本社会福祉学会第61回秋季大会、北星学園大学(北海道・札幌市)、2013年9月22日

野口友紀子、『社会事業』にみる「もうひとつの本質論争」 社会事業の本質はどのように議論されたのか、社会事業史学会第41回大会、淑徳大学(千葉県・千葉市)、2013年5月11日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野口友紀子 (NOGUCHI, Yukiko)  
長野大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：20387418